

平成三十年（二〇一八）三月二十六日発行
『大倉山論集』第六十四輯 抜刷
（公益財団法人 大倉精神文化研究所）

（第三十五回研究所資料展）

白亜の殿堂 大倉山に現る

—新発見の資料からよみ解く—

星 原 大 輔

(第三十五回研究所資料展)

白亜の殿堂 大倉山に現る

―新発見の資料からよみ解く―

星 原 大 輔

旧大倉精神文化研究所本館である横浜市大倉山記念館（以下、記念館）は、昭和七年（一九三二）、所長の大倉邦彦（明治十五年（一八八二）～昭和四十六年（一九七二））の誕生日であった四月九日に竣工した。爾来、当研究所が本館を活動拠点として利用してきたが、昭和五十六年（一九八一）財政上の理由から、敷地を横浜市へ売却し、同時に本館を市へ寄贈した。その後、横浜市は本館の改修を行い、昭和五十九年（一九八四）に現在の名称に改めて開館した。現在、記念館は多くの人びとによって文化活動の発信地として利用されるに至っている。

このように、建物の名称や利用用途は竣工当時から変化しているが、当研究所は設立時から今に至るまで記念館の中で活動を続けている。そのため、当研究所には、大倉が大正時代末に設立を構想した時期から現在まで、記念館や研究所の沿革に関する数万点の資料が所蔵されている。今もなお調査と整理を続けているが、従来知られていなかった本館建設や研究所運営にまつわる資料がこれまでにいくつも見出されてきている。

そこで今回、それら新発見の資料を中心に、①研究所本館を設立するに至った経緯と背景、②研究所本館の建設工事の様子や特徴、そして③戦前の研究所の運営状況を紹介する研究所資料展「白亜の殿堂大倉山に現る」新発見の資料からよみ解く」を開催した。期間は平成二十九年（二〇一七）八月二日（水）から十月二十一日（土）まで、会場日数は五十三日、期間中の入場者数は延べ一〇七六人であった。

本資料展では、展示資料は現物ではなく、すべてデータ化してパネルにて紹介した。本稿では、各パネルのキャプションと展示資料を順に掲げていく。なお、本稿を作成するにあたって、キャプションの一部を加筆修正した。

「あいさつ」

「白亜の殿堂」として親しまれている横浜市大倉山記

念館の建物は、実業家の大倉邦彦が研究所と附属図書館の創立を企図して建設したもので、昭和七年（一九三二）四月九日、大倉精神文化研究所本館として竣工しました。記念館となった現在でも、文化活動の発信地として、地域内外の人びとに利用されています。

当研究所では、大倉邦彦が大正時代末に設立を構想した時期から現在まで、当研究所の沿革に関わる数万点の

資料を所蔵しています。今もなお調査と整理を続けていますが、これまでに従来知られていなかった本館建設や研究所運営に関する事実が、いくつも明らかとなっています。

そこで、今回、それら新発見の資料を中心に、研究所本館を設立するに至った経緯と背景、研究所本館の建設工事の様子や特徴、そして戦前の研究所の運営状況を紹介する資料展示会を企画いたしました。

本展示を通して、普段何気なく眺めている記念館に施されたさまざまな工夫と、大倉が込めた想いを知っていただければ幸いです。

一 研究所本館の設立に至るまで

① 大倉邦彦の事業構想

精神文化図書館の設立構想

関東大震災の余韻もさめやらぬ大正十四年（一九二五）の春、大倉洋紙店などの社長であった大倉邦彦は、「国民の良心の扉」を開きたいとの使命感に燃え、私財を投じて精神文化図書館の設立を考えます。これが、現在までつづく大倉精神文化研究所のはじまりでした。

《展示資料》

・精神文化図書館設立内容・視察要項／大正十五年（一

九二六）

沿革史資料No.821841

大倉は、図書館設立の動機を「宗教的信念に立脚した人生観」を持つ人材の育成と「万古不易の国民精神」の振興としています。その実現のため、図書館・学校・社会施設の調査、一般社会思想の研究、そして名所旧蹟の

歴訪を目的として、欧米諸国へ視察に赴きました。

事業構想の変遷

当初、研究事業は図書館運営の一部と位置づけられていました。その後、準備を進めていくうちに、研究事業がメインとなり、図書館は附属機関へと位置づけが変わりました。昭和四年（一九二九）の春頃、名称も現在の「精神文化研究所」へと変更されました。しかし、当時としてはとても大きな図書館であったからでしょうか、地元の人たちは「研究所」ではなく「図書館」と呼んでいたというエピソードが残っています。

《展示資料》

・大倉邦彦宛五島慶太書簡／昭和四年六月二十二日

沿革史資料No.20038

・大倉邦彦宛五島慶太書簡／昭和四年十月三日

沿革史資料No.20047

② 基本図書の収集、訪欧視察旅行

大倉邦彦は、大正十五年（一九二六）三月、欧米諸国を目指して旅立ちます。目的は、宗教教育の実状と研究所や図書館の運営を視察すること、そして精神文化に関する洋書を購入することでした。

《展示資料》

・ピラミッド前の集合写真／大正十五年四月〔図1〕



【図1】 大倉は後方左端、原田は後方右から2番目

沿革史資料No.688

大正十五年四

月四日にアフリカ大陸に上陸して、カイロに向けて砂漠を横断しています。その途中で撮影されたものと思われます。

・写真「デンマーク国民高等学校の本館裏側」／大正十五年九月二十一日

五年九月二十一日

沿革史資料No.687

大倉はデンマーク国民高等学校を訪問し、校長らの案内で校内を視察しています。教育方針に感銘を受けた大倉は、同校をモデルとして、昭和三年（一九二八）故郷の佐賀県神埼郡西郷村（現 神埼市）に、女子を対象とする農村工芸学院を設立しました。

・写真「国際聯盟本部庭園に向て」／大正十五年十一月十一日

十一日

沿革史資料No.689

スイスのジュネーブにあった国際聯盟本部を訪問したときのもので、国際聯盟事務局員の原田健と写っています。原田はのちに駐バチカン公使、駐イタリア大使、宮内庁式部官長などを歴任しました。

③ 基本図書収集、洋書コレクション

原田三千夫による洋書購入

大倉は、図書館建設を思い立つと、蒐集図書の選択基

準と購入リストの作成を、各分野の専門家に依頼しています。この目録を基に、大倉と秘書の原田^{はらだ}三千夫^{みちお}はイギリス・フランス・ドイツなどで、約八六〇〇冊の貴重な洋書を購入しました。

《展示資料》

・写真「ロンドン郊外にて」／大正十五年

沿革史資料№6878

大倉と一緒に写っている原田三千夫（明治三十三年（一九〇〇）～昭和五十二年（一九七七））は、語学が堪能で、渉外や図書購入を担当しました。大倉が帰国した後も、しばらくヨーロッパにとどまり、昭和三年（一九二八）三月に帰国しました。

・原田三千夫の帰朝報告／昭和三年四月二十日

沿革史資料№82242

大倉の帰国後、原田はイギリスのロンドン、フランスのパリ、ドイツのライプツヒの書店で、目録にある書籍の買い付けを続けていました。しかし「絶版のものが可なり多く」あり、「その半数」しか購入できなかった

ようです。買い付けた書籍のなかには、一五七八年に刊行されたステファヌス版『プラトン全集』（請求記号…I313E1-3）もありました。

洋書コレクション

その後も追加購入をつづけ、現在では約九〇〇〇冊からなるコレクションとなっています。

《展示資料》

・ペロー、シピエ共著『古典古代の美術の歴史6』

請求記号：702.03.P6

フランスの考古学者ペローと建築家シピエによる共著『古典古代の美術の歴史』全十巻のうち、当館は八冊を所蔵しています。一八九四年に刊行された第六巻は「初期のギリシャ、ミュケナイ」に関するもので、記念館の独特な外観・装飾に採用されているプレ・ヘレニック様式を設計する上で、大きな影響を与えたと言われています。

④ 基本図書の収集 ～貴重コレクション～

現在、大倉精神文化研究所附属図書館の図書原簿には、十万余冊の蔵書が登録されています。そのうち、精神文化に関する貴重コレクションが全体の四割を占めており、それが附属図書館の最大の特徴と言えます。これらのコレクションには、大倉邦彦や研究所が購入したものもあれば、大倉の交友関係などがきっかけで寄贈されたものもあります。

そのひとつが、「タゴール文庫」です。ラビンドラナート・タゴール（一八六一～一九四二）は、「詩聖」と呼ばれたインドの有名な文学者・思想家・芸術家です。彼が大倉へ寄贈した著書百五十九冊と、戦後にタゴール記念会が収集した図書九十九冊から成っています。（タゴールからの寄贈本は、本研究所のホームページにて公開中）

《展示資料》

・写真「大倉邸のタゴール」／昭和四年（一九二九）五月十九日
沿革史資料No.8176

昭和四年に來日したタゴールは、大倉の自宅に約一ヶ

月滞在しました。大倉邸で開かれたフイリピンや中華民國の学生を招いた会の一コマです。

・タゴール「別れの詩」／昭和四年六月八日【図2】

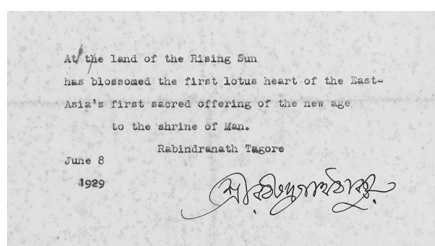
沿革史資料No.12603-56

タゴールが日本を発つ前日、関係者に配布した挨拶状です。翌日の『東京朝日新聞』紙上に、この資料に類似したものが写真で掲載されていますが、当研究所が所蔵する本資料とはサインの筆跡が異なっていることから、

ベンガル語のサインはタゴールの自筆と推定されます。

（『東京朝日新聞』に掲載された日本語訳）

さし昇る旭の国に東の蓮の初花開きけり
ひとみやいの宮居に東亜細亜の
新しき世の聖供物として



【図2】

⑤ 基本図書の収集～古文書古記録の副本～

日本古文書古記録副本作製部

昭和四年四月、大倉は日本古文書古記録副本作製部を設置します。当時、東京帝国大学史料編纂所では、『大日本史料』『大日本古文書』編纂のために、貴重な史料群を全国の旧家・神社・仏閣などから借用していました。その中から、精神文化に関する良書を選び、副本を作製したのです。

この事業は昭和十三年（一九三八）三月まで行なわれ、その数は二百八十部七百五十九冊、枚数にして五万五千五枚、写真版百八十六枚に及びました。

《展示資料》

・写真「大倉と古文書古記録副本作製部」

沿革史資料 No.6878

・『古文書古記録影写副本解題』草稿

沿革史資料 No.3559～3562

古文書古記録影写副本

この時作成された副本は、現在、「古文書古記録影写副本」として、本研究所附属図書館に所蔵されています。副本とはいえ、原本が後に戦災などで失われてしまったものもあり、貴重な史料群として知られています。

《展示資料》

・『古今集聞書 上・下』（昭和四年九月影写）

請求記号 イイ61、2

・『古今和歌抄』（昭和四年四月影写）

請求記号 イイム

二 研究所本館の建設とその特徴

① 建設工事の起工

土地購入

大倉は中目黒に土地を購入し、建設予定地としていました。しかし、アパートなどが建ち始めたため、喧噪を

離れた静かで交通の便のよい土地を探し求めます。そうしてたどり着いたのが、現在の大倉山でした。昭和三年（一九二八）六月のことです。

《展示資料》

・写真「昭和十年頃の大倉山」 沿革史資料No.6764343

・写真「五島慶太らの視察」／昭和六年（一九三一）十

月【図3】

沿革史資料No.6764343

五島らが建設工事の様子を視察に訪れた時のもので、

場所は現在の
ギャラリーの屋
上と推定されま
す。



【図3】 左から三人目が大倉邦彦、二人おいて座っているのが五島慶太

地鎮祭

幾度となく協議を繰り返し、昭和四年（一九二九）九月頃に設計図が完成します。工事の無事を祈って地鎮祭が挙行され、基礎工事がようやく始まりました。

《展示資料》

・写真「大倉精神文化研究所太尾建築現場」

沿革史資料No.8267

現在記念館が建つ丘の上には、わずかに畑があるだけでした。大倉は、東横電鉄（現東急電鉄）の創始者五島慶太と二人で丘の上に立ち、持っていたステッキをぐるっと回して「大体この位の土地が欲しい」とお願いして、土地を買い取ったと語っています。

・写真「地鎮祭」／昭和四年十月三十日

沿革史資料No.126422

建設工事を請け負った職人のご息女である足達和子氏から寄贈された写真の一枚です。地元の師岡熊野神社の宮司らの奉仕によって、厳かに挙行されました。

鎮礎式^{ちんそ}

昭和五年（一九三〇）四月九日、大倉は研究所設立の趣旨を公表するとともに、研究所の根本理念を刻んだ方尖型の銅碑「留魂碑」を本館中央の地中深くに埋めました。留魂碑の高さは二・一mありました。のちに大倉山記念館となった際に、「留魂礎碑」と改称されました。

《展示資料》

- ・写真「鎮礎式」／昭和五年四月九日

沿革史資料No.6759-63

- ・写真「留魂碑」／昭和五年四月九日

沿革史資料No.6936

- ・写真「地中に埋められる留魂碑」／昭和五年四月九日

沿革史資料No.12605-7-24（石井肇氏提供）

建設中の様子

大倉の念願であった大倉精神文化研究所本館は、昭和七年（一九三二）四月九日に竣工しました。この日は大倉の満五十歳の誕生日でもありました。建設中の写真は

本研究所にも残されていましたが、関係者のご子孫から新たな写真資料を寄贈・提供されたことで、建設過程がより明らかになってきています。

《展示資料》

- ・写真「建設中の大倉精神文化研究所本館」

沿革史資料No.6878／No.12605-7-4-1（石井肇氏提供）／No.12605-7-10-2（石井肇氏提供）／No.12605-7-2-2（石井肇氏提供）／No.6759-59

② 駅名の変遷 ～太尾駅から大倉山駅へ～

駅名の変遷

現在、記念館の最寄り駅は「大倉山駅」です。もともとの駅名は「太尾駅^{ふとお}」でしたが、建物が竣工する直前の昭和七年三月に変更されて、現在の駅名となりました。

《展示資料》

- ・大倉邦彦宛金坂吉三葉書／昭和六年元旦

沿革史資料No.50844

・大倉邦彦宛前川清一郎書簡／昭和十一年（一九三六）

六月

沿革史資料No.80451

大倉山駅改装の落成祝賀会の案内状です。それまで坂道の途中にあった改札口が坂下に移されて、現在の場所に新しい駅舎が作られました。差出人である前川清一郎は、記念館正面向かって左側にそびえたつ樅^{かや}の木を寄付した人物です。

「大倉山駅」の由来

太尾駅から大倉山駅への駅名変更には、大倉邦彦と大倉精神文化研究所が深く関わっていました。

《展示資料》

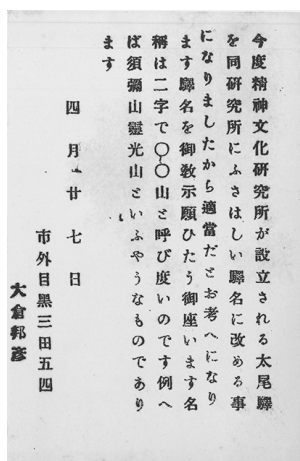
・大倉邦彦葉書／昭和六年（一九三一）カ四月二十七日

【図4】

沿革史資料No.77909

大倉と親交のあった仏教学者の藤原猶雪^{かじのゆき}宛の未投函の葉書です。東京横浜電鉄（現 東急電鉄）から、駅名変更の相談を受けた大倉は、知り合いの研究者たちに「研究所にふさはしい駅名」の候補を挙げてもらいたいと依

頼したようです。大倉が「名称は二字で、○○山と呼び度^{たい}い」という意向を持っていたことがわかります。



【図4】

・原田三千夫宛立花栄吉書簡／昭和六年十二月四日

沿革史資料No.8157

東京横浜電鉄の運輸課長である立花から、社内会議で新しい駅名が「大倉山」に決定したことを伝える書簡です。研究所は、はじめ「大倉研究所」案を示し（十月三十一日）、その後「大倉文研」「研究所前」「大倉山」の三案を提案していました（十一月二十四日）。

③ 設計者と施工業者

長野宇平治と竹中工務店

大倉精神文化研究所本館の設計を担当したのは、長野^{ながの}宇平治^{うへいじ}（慶応三年（一八六七）～昭和十二年（一九三七））です。大倉とは東京ロータリークラブで知り合い、親交を深めたようです。大正十二年（一九二三）の関東大震災で、大倉洋紙店本店が焼失すると、長野が新社屋の設計を担当しました。その仕事振りが評価され、長野に白羽の矢が立ったと思われます。

そして、研究所本館の施工を請け負ったのは、竹中工務店でした。同工務店は、大倉洋紙店の新社屋も施工しています。

《展示資料》

・（大倉精神文化研究所建築請負）契約書／昭和四年（一九二九）十二月一日
沿革史資料No.3694

契約書では、昭和五年十月三十一日までに完成する予定になっていましたが、実際には、昭和七年（一九三

二）四月までかかりました。

・建築現場監督嘱託状／昭和四年十月一日

沿革史資料No.126053（石井肇氏提供）

施工業者の竹中工務店ではなく、施主の大倉が建築現場監督の委嘱契約を直接結んでいます。

受注を希望した建築会社

竹中工務店以外にも、受注を希望した建築会社がありました。それは、清水組（現清水建設）です。

《展示資料》

・大倉邦彦宛清水^{しみず}釘吉^{くわきち}書簡／昭和四年八月三日

沿革史資料No.38947

清水釘吉（慶応三年～昭和二十三年（一九四八））は、清水組の代表者で、のちに代表取締役社長を務めました。「特殊の技術を要する工事」の経験は豊富なので、ぜひとも受注したいと伝えています。清水組は、横浜市内ではホテルニューグランド本館や旧横浜銀行本店別館などを施工しています。

④ 建築装飾くペディメント・テラコッタ像く

大倉精神文化研究所本館の建築装飾を担当したのは、長崎県島原市出身の彫刻家・水谷鐵也（明治九年（一八七六）～昭和十八年（一九四三））です。水谷は若くして長野宇平治に才能を認められ、長野が手掛けた様々な建築物の建築装飾を担当していました。研究所本館では、ペディメント、テラコッタ像、そして留魂碑（現留魂礎碑）の制作を担当しました。

正面入口のペディメント

ペディメント（破風）とは、切妻屋根の三角形の部分のことです。建物正面に位置するこの場所には、建物を象徴する彫刻が施されることが通例でした。

《展示資料》

・「吉祥天デッサン」【図3】 沿革史資料№28218-39-13

水谷自筆の初期のデザインと推定されます。当初、大倉は「神道、仏教の楽器又は儀式に用ゆる道具等を入れる、簾、ヒチリキ、釣鐘、木魚等をハーモナイズする表

象」にしたいと考えていました。

・写真「ペディメントの原型」【図4】

沿革史資料№2761-189

中央の鏡は正倉院御物の八稜鏡を模したもので、左右を二羽の鳳凰が雲に乗り、綬をくわえて守護しています。現在、記念館入口に掲げられている原型です。



【図5】



【図6】

エントランスホール吹き抜けのテラコッタ像

テラコッタとは、土を焼いて作る素焼の彫刻です。専門家の手によって造られ、かつ現存しているものは数え

るほどしかなく、非常に貴重な作品群です。

《展示資料》

・大倉邦彦宛水谷鐵也葉書／昭和六年（一九三二）五月二十二日
沿革史資料No.3059

「四、五日後焼きにかか」るので、その前に見に来てほしいと伝えていきます。水谷は製作状況を大倉らに逐一伝えていたようです。

・写真「獅子と鷺のテラコッタ像」／平成二十三年（二

〇一一）撮影

獅子八体、鷺八体の計十六体のテラコッタ像は、ひとつひとつ、形と向きが異なっています。そして、下から見上げた時には、必ずどれか一体と目が合うようになっています。

⑤ 最新技術「吹付け・不ニサツシ」

大正十二年（一九二三）の関東大震災では、木造住宅が延焼して多くの人命が失われました。そのため、建物の耐火性能がとても重要視されるようになります。大倉

は本館を建設するにあたって、当時の最新技術を積極的に採用しました。

外壁の吹付け

当初、本館の外壁はタイル張りで計画されていました。しかし、廉価で耐火性が高いことから、三色からなる「斑入り白セメント吹付け」に変更されました。「白亜の殿堂」と称される建物の色は、こうして誕生しました。

この工事が日本の建築史上初めて、吹付け工法が実用化された工事でした。ただし、その後二回改修が施されたため、残念ながら、現在の外壁は建築当初のものではありません。

《展示資料》

・ウォーガン工業事務所書簡／昭和五年（一九三〇）八月十七日
沿革史資料No.3566-14

「ウォーガンイミテックス」は、横浜の左官・久保田由太郎が考案した、白色セメントを霧状に吹付ける新しい工法です。ウォーガン工業事務所は、その工法を専門

とする会社です。

防火シャッター

国産シャッター業界大手であった大野製作所は、約十年間の研究を経て、昭和三年（一九二八）に新しいスチールシャッターを開発します。アメリカの耐火試験でも好結果を出したことで、大型の発注が舞い込むようになり、大野製作所は不二サッシ製作所を昭和五年（一九三〇）に設立します。現在の不二サッシ株式会社の前身です。この防火シャッターが、本館にも採用されました。

《展示資料》

・「最近採用せられたる建物の二三」

沿革史資料No.6761-189

大野製作所が、検討材料として提出した書類の一つです。明治神宮記念絵画館や三井銀行横浜支店（現 三井住友銀行横浜支店）などが列挙されています。

・原田三千夫宛藤田直寛書簡／昭和五年五月十四日

沿革史資料No.20187

藤田直寛は不二サッシ製作所の代表で、本資料は請書の添状です。当初の見積が高額であったため、交渉して若干値引きしてもらい、契約が成立しました。

⑥ 図書館設備 〈書架・リフト〉

五層積層式鋼鉄製書架

図書館を設立するにあたって、多くの書籍を収容できる書架が必要でした。そこで採用されたのが、五層積層式鋼鉄製書架です。アメリカ議会図書館で採用されて以降、この書架は利便性が高く構造的に優れているとして、当時の図書館界で注目されていました。

《展示資料》

・本研究所附属図書館の書架の側面図／『図書館学講座』第十二巻（昭和六年三月）所載

沿革史資料No.8386

アメリカの Library Bureau 社の書架を輸入して、若干改良した上で設置しました。

・写真「建設工事中の研究所本館」／昭和五年カ

沿革史資料No.6759-68

・写真「竣工時の書架」

沿革史資料No.6761-189

積層式鋼鉄書架は、各天井まで効率的に図書が配架できるといふメリットがあります。また書架の柱を直接床に取りつけることで、かなりの荷重に耐えられ、かつ柱が書庫の骨組みの役目も果たすのも特徴です。

ブックリフト

当時、図書館ではもっこなどを用いて図書を運搬するのが通例でした。しかし本附属図書館には、最先端の図書運搬用の電動式リフトが設備されていました。

《展示資料》

・ブックリフト／平成十八年（二〇〇六）撮影

⑦ 研究所本館の鐘／打鐘・梵鐘／

打鐘

竣工した直後の本館には、西洋式の鐘が吊るされている

白亜の殿堂 大倉山に現る（星原）

たようです。残念ながら、それを裏付ける資料や写真はまだ見つかっていませんが、当時の様子について、左のような回想が残っています。

我ら六年生は、この秋〔筆者注：昭和七年秋〕、太尾^{たご}の山の上に完成した図書館を見学した。（中略）図書館では、毎朝九時になると鐘を鳴らした。

それはお寺の釣鐘の音色ではなかった。俺たちの聞いたことのない西洋の音色が、稲田を伝わって聞こえてくるのである。山頂で、あたりには何の障害物もない田園であつたから、綱島^{つなしま}・師岡^{もろおか}・菊名^{きくな}・小机^{こぐえ}・新羽^{にんば}・吉田の四方から見え、その鐘の音は、一里四方からも聞こえてきたものだ。（「大倉山の図書館」滝嶋芳夫『おやじとおれたちの都筑・新田村小学校』より）

《展示資料》

・打鐘装置14（図面）

沿革史資料No.3566-14

図面では、鐘にモーターによる打鐘装置が取付けられていて、一分間に四十回、自動的に打鐘されるよう設計

されています。前記の回想に出てくる鐘の図面かもしれません。

梵鐘

昭和八年（一九三三）六月に、京都の高橋鐘聲堂（高橋才治郎商店）に梵鐘の鑄造を依頼しています。この梵鐘は塔屋の西側に吊るされ、記録によると、同年七月十三日から毎日五時、正午、十三時、十七時、二十一時に撞かれました。残念ながら、昭和十八年（一九四三）七月に供出されたため、この梵鐘は現存していません。

《展示資料》

- ・写真「塔屋に吊るされた梵鐘」沿革史資料No.61789
梵鐘には、大倉による鐘銘が刻まれました。
- ・大倉邦彦宛高橋才治郎書簡／昭和八年七月四日

沿革史資料No.23571

梵鐘の鑄造が無事完了したことを報告した書簡です。

高橋才治郎は仏具金物の鑄造を専門とする鋳物師で、高

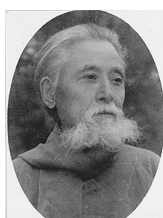
橋鐘聲堂を創立し、全国各地の銅像や梵鐘を作成しました。関東一の大きさを誇る総持寺の大梵鐘も、この鐘聲堂によって鑄造されたものです。

⑧ 日本精神文化曼荼羅

井村方外

現在、附属図書館に入って右側に、「日本精神文化曼荼羅」という大きな日本画が飾られています。かつては応接室（現 第五集会室）に掲げられていました。

大倉が、日本精神を代表する歴史上の人物を通して、研究所の精神を可視化しようとしたと考えられています。人物の選定は仏教史学者の辻善之助^{つじぜんのすけ}や藤原猶雪らが、描画は宗教画家の井村方外が担当しました。



【図7】 井村方外

《展示資料》

- ・写真「井村方外」【図7】

沿革史資料No.213

明治十二年（一八七九）

昭和二十一年（一九四六）、三重県伊勢市出身、名は忠吉。山元春拳・寺崎広業に師事し、文展に三回入選しています。また禅や武道の造詣も深く、「剣禅画一致」を提唱しました。

・井村方外画「日本精神文化曼荼羅」

沿革史資料No.11032

しょうてくたいし

聖徳太子を中心に神道、仏教、儒教を極めた先哲たちを描き、四隅に仏教の守護神である四天王を配置した構図には、三教一致という日本の伝統文化を大事に守り伝え、世界に広めていこうという大倉の思いが込められています。

・大倉邦彦宛井村方外書簡／昭和五年（一九三〇）六月

二日

沿革史資料No.38898

井村が「画想」を練るために「旧都」に赴くなど、「宗教的芸術としての力を種々の方面より發揮致し度、装飾等の点も苦心仕り、小生の頭脳の及ぶ限りを尽くして一創作を作り出さん」との意気込みで取り組んでいることを伝えています。さらに、「画像模写」をしたいの

で「七名高僧のお名前」を知らせてほしいとあり、井村がいくつかの画像や彫刻などを調べた上で、描画したことがうかがえます。

本研究所が所蔵する井村の作品

《展示資料》

・井村方外画「惠美須ノ図」

沿革史資料No.12358

・井村方外画「降魔之図」

沿革史資料No.12359

・井村方外画「菅公図」

沿革史資料No.12360

三 戦前における研究所の運営

① 研究所の活動と研究事業

大倉は、「世界史を貫く人類文化の普遍的意義」と「我が国体の本質に基く精神文化」を明らかにすべく、斯界の第一人者を招き、研究事業を進めました。主な大事業としては、『神典』編纂と『大日本精神史』編修があります。

《展示資料》

・写真「植木直一郎」
うえき なおいちろう

『國史学論集』より

明治十一年（一八七八）～昭和三十四年（一九五九）、
國學院大學教授。法制史学者。『神典』編纂の主たる実
務を担当しました。

・写真「西晋一郎」
にしん いちろう

『清風録』より

明治六年（一八七三）～昭和十八年（一九四三）、広
島文理科大学教授。西田幾多郎と並び称された倫理哲学
界の重鎮でした。『大日本精神史』編修部長を務めまし
た。

・写真「大日本精神史編修室」 沿革史資料No.675831

左に座っているのが、『大日本精神史』編修長を務め
た新見吉治（しんみきち）（明治七年（一八七四）～昭和四十九年（一
九七四））です。

研究員

大倉は、優秀な若手研究者を研究員として採用し、研
究と実践の場を提供しました。その中には、のちにその

研究分野における泰斗となった人もいます。

《展示資料》

・宿直日誌一

沿革史資料No.2612

研究員や所員は、修養会の指導員なども担当していま
した。昭和十四年（一九三九）十月十日に神奈川県庁員
修養会があり、岡田俊平、岡崎賢次、山田勝二、山田
晴雄、西田長男、高橋八郎が班長などを務めていたこと
が確認できます。

・大倉邦彦宛秋山大書簡／昭和十五年（一九四〇）二
月五日

沿革史資料No.35075

秋山大（明治三十九年（一九〇六）～昭和二十一年
（一九四六））は、司馬遼太郎の代表作『坂の上の雲』の
主人公、秋山真之の長男です。父と祖父の影響で宗教芸
術の研究に取り組み、昭和八年（一九三三）八月から当
研究所の研究嘱託となりました。本書簡は、自分の著書
『現世信仰の表現としての薬師造像』が研究所から出版
されることを、父の二十三回忌の「法要」で「霊前」に
報告したことを伝えたものです。

② 研究所の活動〈採用依頼〉

沿革史資料№61137

研究所創立のことが新聞等で報道されると、全国各地から入所を希望する手紙が殺到します。本人自ら書いたものもあれば、教え子や知人を推薦したものもあります。非採用となったものの中から、興味深い書簡二通を紹介します。

平 等 通 昭 書 簡

《展示資料》

・原田三千夫宛平等通昭書簡／昭和五年（一九三〇）五月二十四日

月二十四日

沿革史資料№20197

平等通昭（明治三十六年（一九〇三）～平成五年（一九九三））は、区内新羽町善教寺の住職です。仏教学者木村泰賢は、鎮礎式で大倉に採用を依頼することを、平等と約束していたのですが、その結果を伝える前に、五月十六日に急死してしまいます。そこで、平等が原田にこの件について問い合わせをした書簡です。

・大倉邦彦宛平等通昭葉書／昭和十年（一九三五）元旦

インド仏教文学とパーリ語を研究していた平等は、その後インドへ留学し、タゴールから直接教えを受けています。葉書の左上には「タゴール翁より宜しく申されました」と書かれています。

平 泉 澄 書 簡

《展示資料》

・大倉邦彦宛平泉澄書簡／昭和八年十一月三日

沿革史資料№35075

平泉澄（明治二十八年（一八九五）～昭和五十九年（一九八四）、日本中世史学者）が、弟子で日本刀の研究に取り組んでいた岩崎航介（明治三十六年～昭和四十二年（一九六七））の採用を依頼した書簡です。岩崎は東京帝国大学国史学科を卒業した後、逗子開成中学校の講師を勤めながら工学部に再入学しており、平泉は「研究所にて御採用御援助」して欲しいと述べています。また、岩崎と懇意にしている秋山大から色々と聞いてもらいた

いとも記されています。

戦後、岩崎は故郷の新潟県三条市に帰り、金属顕微鏡を用いた科学的分析を用いて玉鋼たまはがねを使った刃物製造法の確立に努めるなど、世界的に知られる燕三条の刃物産業の発展に多大な功績を残しました。

③ 研究所の活動〈参観〉

大倉精神文化研究所本館が完成すると、近隣だけでなく、全国各地から見学に訪れる人が絶えませんでした。大倉は時間が許す限り自ら館内を案内し、講話などをしています。

《展示資料》

・写真「横浜高等女学校参観」／昭和十一年（一九三六）一月十五日 沿革史資料No.6764375

横浜高等女学校（現 横浜学園高等学校）の教員・生徒約千名が見学に来た時のものです。大倉が入口前に立って話をしています。小説『山月記』さんげつぎの作者として著名な中島敦は、同校の教員でしたので、この中にいたか

もしれません。

桜楓会おうふうかいからのお礼状

《展示資料》

・大倉邦彦宛桜楓会書簡／昭和九年（一九三四）五月二日 沿革史資料No.27871

桜楓会は日本女子大学校（現 日本女子大学）の卒業生が運営していた団体です。前日の五月一日に同会関係者が来訪した際に、大倉に館内を案内してもらったことへのお礼を述べています。「御立派な御精神により建てられました御意図の大きさと御建築の完備」に驚き、「自分たちもこれではならないと反省して帰途につきました」と伝えています。

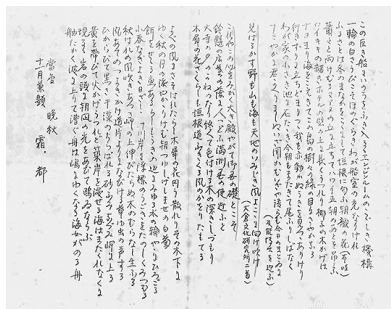
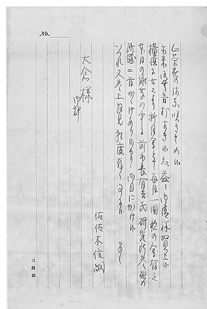
有吉忠一ありよしちゅういちの和歌

《展示資料》

・大倉邦彦宛佐佐木信綱書簡／昭和七年（一九三二）十一月二日 沿革史資料No.38853

佐佐木信綱（明治五年（一八七二）～昭和三十八年

(一九六三) は歌人です。横浜に佐佐木の門人たちによる新月会という歌会がありました。そのメンバーのひとりに、横浜の震災復興に尽力した第十代横浜市長の有吉忠一(明治六年(一八七三)～昭和二十二年(一九四七))がいます。佐佐木は有吉が研究所のことを詠んでいる和歌を見つけ、大倉にそのことを伝えた書簡です。



【図8】佐佐木書簡および別紙

大倉文化研究所(二首)
見はるかす野も山も
海も天地のいみじき
風よこ、に向け吹け
これやこの心をみが
く大き殿やがて御国
の礎とこそ

④ 研究所の活動と修養会

大倉は「人間には人相応に重大なる任務を果すべき使命がある。その為には心に堅き信念を必要とする。信念なき仕事は砂上の楼閣である。されば根本動力としての信念を養ふことが修養であらねばならぬ。」と述べています。ここでいう修養とは「真の創造的研究と実践」のことで、そのためには「宗教的信仰と体験的行の生活」が必要であると考えていました。

修養会のはじまり

ある日、大倉は桜楓会横浜支部の会員である母親たちから、子供の生活態度などについて相談を受けます。これがきっかけとなり、昭和八年(一九三三)八月、大倉は桜楓会会員の子供を対象に、「宗教的情操教育」「行を通じての体験的教育」を施す修養会を開催することになります。

《展示資料》

・写真「横浜婦人修養会例会」／昭和九年二月二日

沿革史資料No.6763-298

相談した母親たちも修養会を結成し、月一回、大倉と
仏典などの勉強をしました。

各種団体の修養会

この修養会はたちまち評判となり、官庁や学校、民間
企業などが研究所に、修養会開催を次々と依頼してくる
ようになりました。そこで、大倉は修養会を研究所の実
践事業の一つに位置づけることにします。

《展示資料》

・写真「神奈川県中学校校長修養会」／年月不明

沿革史資料No.6763-256

・写真「神奈川県橘樹郡女子訓導修養会」／昭和十年
(一九三五) 六月

沿革史資料No.6764-310

・写真「第八回大倉山中等学生修養会」／昭和十年八月

沿革史資料No.6763-257

・写真「神奈川県女子師範生徒修養会」／昭和十年十一
月

沿革史資料No.6763-289

・写真「神奈川県庁吏修養会」／昭和十二年(一九三
七)十一月

沿革史資料No.6763-295

・写真「第二十回学生修養会」／昭和十四年(一九三
九)三月

沿革史資料No.6762-222

修養会の一日の流れ

修養会は当日限りの場合もあれば、連泊の場合もあり
ました。ここでは、第五回大倉山中等学生修養会(昭和
九年(一九三四)八月二十二日～二十七日)の時間表を

午前		
5:00～5:20	起床洗面	梵鐘
5:20～6:00	清掃体操	半鐘
6:00～6:20	神前礼拝	半鐘
6:20～7:00	定坐	板木
7:00～8:30	朝食	半鐘
8:30～9:30	所長講話	半鐘
9:30～12:00	自習	
12:00～13:00	昼食、休憩 ※1	
午後		
13:00～14:00	唱歌及読経練習	半鐘
14:00～15:00	作務 ※2	半鐘
15:00～15:30	お茶 ※3	梵鐘
15:30～17:00	作務	半鐘
17:00～18:00	入浴	半鐘
18:00～19:30	夕食	半鐘
19:30～20:30	茶礼	半鐘
20:00～20:30	定坐 ※4	半鐘
21:00～	就寝	梵鐘

第5回大倉山中等学生修養会
時間表(大倉邦彦「私の使命
事業 皇紀二五九四年度」よ
り作成)

基に、他の修養会での感想文や写真を用いて、修養会の一日の流れを紹介します。

《展示資料》

・写真「食事風景」／年月不明

沿革史資料No.6762-223

食前に「食前静思」が朗読されました。なお、修養会中は「無言厳守」でした。

・写真「作務の様子」／年月不明

沿革史資料No.6781／6762-247

作務では、草取りなどの肉体労働や周辺の掃除などを行いました。大倉や指導員の研究員も作業服を着て、一緒に汗を流しました。現在の大倉山公園の広場や駅からの道路は、こうした作務によって整備されました。

・写真「休憩の様子」／年月不明

沿革史資料No.6778

班ごとに集まって、おやつを食べたり、食後に大倉が作詞した「修養会歌」を歌ったりしました。

・写真「座禅風景」／年月不明

沿革史資料No.6758-10

一日に二回、定坐（座禅）が行なわれていました。現在、この座禅道場は、横浜市大倉山記念館のギャラリーとなっています。

⑤ 研究所の活動と研究所の刊行物

大倉は、当研究所は「基礎研究」ではなく、世の中にすぐに役立つ「臨床研究」をすることで常々語っていました。そこで、知人の研究者や研究員を通して、わが国の歴史や古典、精神修養に関する講演会を開き、書籍を刊行するなど、普及活動に努めました。特に、『神典』や雑誌『感想』『躬行』はひろく普及し、大倉と研究所の名を世に知らしめました。

《展示資料》

・写真「神典」／昭和十一年（一九三六）二月刊行

沿革史資料No.8176

「古事記」「日本書紀」「古語拾遺」「延喜式」などの古典の全文または抄録を取めた二千百ページを超える大冊

です。漢文を書き下し、すべての漢字にフリガナを付すなど、読みやすく編纂されているため、今なお版を重ねています。この『神典』編纂が、本研究の最初の大事業でした。

・写真「『感想（其一二）』／大正十四年（一九二五）七月刊行

沿革史資料No.1089

大正十四年から昭和十二年（一九三七）まで、毎年一回発行した冊子。最初は、大倉洋紙店の社員教育のため、大倉の精神修養に関する短文をまとめた非売品でした。

しかし瞬く間に反響を呼び、頒布部数は二百九十一万部にも達しました。英訳『MY THOUGHTS』も刊行されています。なお、雑誌『躬行』に掲載された随想もすべて含めて、平成十五年（二〇〇三）に当研究所から『大倉邦彦の『感想』』が刊行されています。

・写真「躬行会編『躬行』第一号」／昭和九年（一九三三）三月刊行

沿革史資料No.2361

大倉自ら監修した月刊修養雑誌。百三十三号（昭和二十年二月）まで刊行されました。大倉は、『感想』の反

響を知りたく、また年一回の刊行では物足りないと感じ、「読者諸君と始終接触を保つ機関」として躬行会を発足させ、同誌の刊行を始めました。名称は、大倉の座右の銘のひとつである「実践躬行」に由来します。大倉の随想のほか、研究員によるコラム、研究所等の活動報告などが掲載されました。

⑥ 研究所の活動と著名人からの礼状

当研究所の沿革史資料には、研究所の刊行物や大倉の著書に対する感想が書かれた手紙や葉書が多数残っています。ここでは、著書や刊行物を贈呈された著名人からの礼状の一部を紹介します。

竹越與三郎

慶応元年（一八六五）～昭和二十五年（一九五〇）、歴史学者。『二千五百年史』などを執筆。政治家やジャーナリストとしても活動しました。本書簡は『感想』其九の贈呈への礼状で、「昨夜者朝方まで拝読」したと伝え

ています。

《展示資料》

・竹越與三郎書簡／昭和八年（一九三三）二月十四日

沿革史資料No.2375

井上秀
いのうえひで

明治八年（一八七五）～昭和三十八年（一九六三）、

家政学者・教育家。広岡浅子に誘われて日本女子大学校（現 日本女子大学）に入学し、第一期生として卒業しました。のちに同校初の女性校長（第四代）を務めました。本書簡は『感想』贈呈への礼状で、大倉の言葉を「日々躬行の指針と致すべし」と記されています。

《展示資料》

・井上秀書簡／昭和九年二月十三日

沿革史資料No.27105

會津八一
あいづ やいち

明治十四年（一八八一）～昭和三十一年（一九五六）、

美術史家・書家。秋艸道人の号で知られる歌人でもあり、

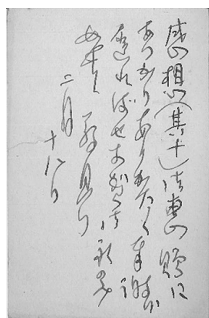
自ら揮毫した歌碑が各地に建立されています。本書簡は

『感想』其十の贈呈への礼状です。

《展示資料》

・會津八一書簡／昭和九年二月十九日〔図9〕

沿革史資料No.39423



【図9】 會津八一葉書

星
ほしはじめ

明治六年（一八七三）～昭和二十六年（一九五二）、

福島県出身、企業家。星製薬を創業し、日本の製薬王と称されました。また、同郷の野口英世を経済的に支援し、星薬科大学を創立するなど、医学の発展にも努めました。SF作家星新一の父でもあります。本書簡は『感想』其十一の贈呈への礼状です。

《展示資料》

- ・星一書簡／昭和十年（一九三五）四月十六日

沿革史資料No.62677

吉岡彌生
よしおかやよい

明治四年（一八七二）～昭和三十四年（一九五九）、

教育者。東京女医学校（現 東京女子医科大学）を創設し、女性医師の養成や医学の発展に尽力しました。本書簡は『感想』其十三の贈呈への礼状で、大倉の考えを當時の社会に対する「頂門の一針」と激賞しています。

《展示資料》

- ・吉岡彌生書簡／昭和十二年（一九三七）二月十三日

沿革史資料No.31409

石原莞爾
いしはらかんじ

明治二十二年（一八八九）～昭和二十四年（一九四

九）、陸軍軍人。この時は参謀本部作戦部長を務めていました。本書簡は、大倉自著『祭政一致と臣民道』の贈呈への礼状です。

《展示資料》

- ・石原莞爾書簡／昭和十二年四月十九日

沿革史資料No.66768